

播磨灘物語

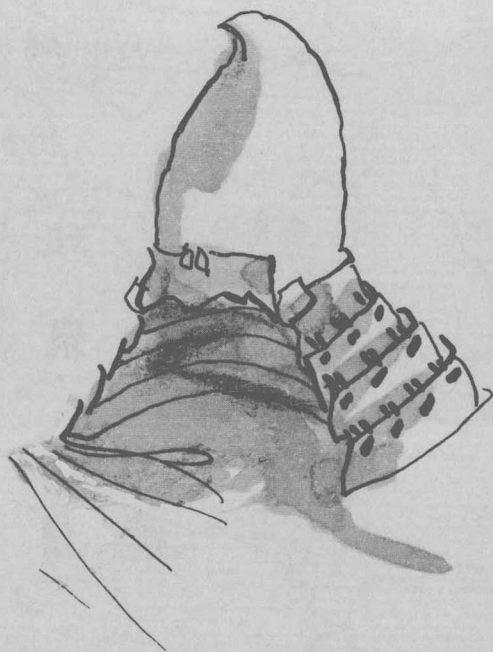
(中)

司馬遼太郎



播磨灘物語 (中)

司馬遼太郎



講談社

© 1975
RYÔTARÔ SHIBA

第1刷 昭和50年7月20日

第3刷 昭和50年8月24日



Printed in Japan

落丁本・乱丁本は
お取替え致します

播磨灘物語（中）

著者 司馬遼太郎

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21

郵便番号112

振替東京3930

電話東京(03)945-1111(大代表)

印刷所 豊国オフセット株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

定価はカバーに表示してあります (文2)

目次

加古川評定

三木城

風の行方

秋浅く

村重

御着城

五

元

美

三

二四

一三

撰津伊丹

一頁

藤の花房

一頁

夏から秋へ

二五

村重の落去

二六

別所衆

二頁

装釘意匠 三井永一

播磨灘物語
(中)

加古川評定

秀吉は上月・佐用の二つの小さな山城を陥したあと、ひとまず姫路を去り、近江安土に帰った。

姫路を去るについて、

「安土殿（信長）に播州をこのように仕置したということ、言上せねばならぬ」

と、秀吉は官兵衛にいった。信長は、遠征の将がながく敵陣にとどまっているのを多少不安がるところがある。すぐさま謀反に結びつけるほど信長は単純では

ないが、すくなくとも永留守をするより、余暇をみつけては報告に帰ってくるという状態を好んでいる。

（大変なことだ）

と、官兵衛は秀吉に同情する気持があり、秀吉がともかくも信長によくつとめ、その機嫌に対して周到に気をくばっているのをみて、普通の大將にはできないことだ、と思ったりした。やはり秀吉が、最下級の階層からあがってきたという生立を考えねば理解できないであろう。

しかし、官兵衛は播州の潜在的な情勢にやきもきしている。いま秀吉が播州を去ってしまったら、あと、どのように情勢が急変するかわからない。

「代人では、なりませぬか」

「いや、別に支度もある」

秀吉はいった。再度播州に来るときには人数をもつと率いて来なければならない。その準備のために、安土に登城したあと、長浜城にもどり、さまざまな支度をせねばならない、といった。

もっとも秀吉にすれば、さきに姫路入りしたとき、使いを安土の信長に送って、

「来月(十一月)初旬には播州平定つかまつりまする」と、景氣のいいことを言った手前、上月・佐用の両城をおとしたこの段階をもって播州平定が一段落した、ということにしたい。ところで、すでに十二月に入っていた。秀吉が信長に対して請け合った期限をとくに過ぎていのである。秀吉にすればともかくも信長の顔を見ておかねばならない。

秀吉は、自分の弟の小一郎を姫路の城代として残り、大部分の兵をひきいて上方にむかった。

ついでながら、陥落させた上月城には、

「尼子の者」

とよばれる牢人衆七百を入れておいた。尼子氏はかつて山陰の大名だったが、毛利氏に攻めつぶされ、いまは残党といわれる者が残っているにすぎない。その中に山中鹿之介という者がいて、若いころ京都あたりの貴頭の屋敷に出入りしていたこともあり、名前はひろく世間にきこえていた。この鹿之介が尼子氏の再興を生涯の望みとし、以前から柴田勝家を通じて信長に庇護を求めていたのである。

秀吉は鹿之介とは懇意ではなかったが、信長の指図

でもあり、これをして上月城を守らせた。鹿之介は尼子勝久という主家の血をひく者を載いている。

(あのわずかな人数で、上月城は守れるか)

と、官兵衛は不安だったが、秀吉にすれば、かれの好まない柴田勝家が鹿之介の直接の庇護者になっているということもあって、上月城はいざというときは捨ててしまうつもりでいたのであろう。

秀吉が、いわば凱旋のようにして近江安土城にもどったのは、天正五年十二月中旬である。意外にも、信長は留守だった。

鷹狩のすきな信長は、鷹野のためににわかに三河へ行ったという。三河の同盟者である徳川家康と直談したいこともあったにちがいない。このところ、織田氏をとりまく形勢は、以前よりやや緩和された気味があった。ただ怖るべき者の筆頭は越後の上杉謙信で、かれは関東で北条氏と城地の取り合いをしているために上洛が遅れているが、年が明け、雪が融ければふたたび麾下の大軍団に上洛の号令をかけるという風聞も、信長の手もとに入っている。そのときは家康の力を借

りねばならぬということも、懸案のなかにあったであらう。

毛利氏は大勢力ながら、なにぶん慎重で鳴る家風だけに、すぐには大攻勢に出まい。それに信長はたれよりも羽柴秀吉の力量を信頼していたから、他の方面よりは安心していた。

それよりも、上杉氏や毛利氏との決戦の前に、できるだけ余力を掻きあつめて大坂の本願寺をつぶしておきたかった。信長に泥沼のような長期戦を強いたという点で、本願寺ほど始末のわるい敵はなかった。

ともあれ、多忙をかさねてきた信長は三河へ鷹野にゆく程度の余暇をもつことができたのである。

秀吉が安土城に登ると、信長の側近から伝言をつたえられた。信長は秀吉の播州平定事業についてひどく上機嫌であるという。とりあえず秀吉が安土に来れば以下の品々をつかわすように、ということ、信長が大切にしていた「乙御前の茶釜」が置かれていた。

秀吉は、居城の長浜城に入り、留守中に滞った家政を裁断した。財政のことが大部だったが、兵事もあつた。かれは財政のゆるすかぎり、兵員を召しかかえよ

うとしていた。秀吉は一人でも多く兵がほしかった。「近江にはもうよい者はいないか」

と、播州にいるときも、近江の長浜から使いが来るたびにきいた。秀吉がはじめて近江長浜で大名として封ぜられて三年になる。かれはにわかに家士を大募集した。辻々に高札を立てたとさえいわれている。召募に応じてきたのはほとんどが近江のもとの大名の浅井氏の旧臣で、戦闘に習熟した者が多かった。秀吉はそれ以上に兵員がほしかった。なにしろ、毛利氏という大勢力を、長浜二十万石程度の自分が、ある期間まで一手でもって相手にしてゆかねばならない。

むろん、新付の播州勢は使う。使うにしても、本軍の威容というものがなければ、新付の者たちの心は靡かないのである。

もっとも、秀吉はこの時期、景気よく虚勢を張っていたが、実際には剣の刃の上を渡るような危険さのなかにいたといっている。播州勢が織田氏の味方になったということで安土へ報告に帰り、正月を長浜ですごしたのだが、しかし実情はまったく相違してしまつた。年があけてしばらくすると、播州勢の九割九分までが

毛利方にひるがえるという事態がおこるのである。

秀吉がふたたび近江から播州へ下向するのは、天正六年二月の梅花がほころびる頃であった。

人数、七千五百。織田氏の風として軍装は華麗で、沿道のひとびとは一騎一騎の兜や陣羽織を見ているだけで見飽きることがない。

七千以上の人数はもはや堂々たる戦略単位の大軍団といっている。

むろん、毛利という大勢力との対戦を考えるとなれば比較にもならぬ小勢なのだが、しかし播州一国の安定のためなら、十分な軍勢力といえるものであった。秀吉にすればまず播州の土着勢力を鎮め、それを兵力に加えて行って毛利氏と対決したい。

が、思惑どおりにいくかどうか。

この時期、秀吉ほど人心を攪ることに巧みな男が、播州における豪族個々の心を収攬してゆこうとせず、どちらかといえば威力主義で播州に望もうとしていることが、ふしぎなほどである。

——工作は、官兵衛にまかせてある。

ということもあったであろう。秀吉は自分に似たやり方で人の心を寄せてゆく官兵衛のやりかたに、いわば分身を見るようにして安心はしていた。

しかし、官兵衛の身分はひくい。

豪族ともいえず、豪族の家にすぎない。そういう立場の男がやれる範囲というのは、たかが知れている。

秀吉みずからが懐柔すればいいのだが、しかしこの時期の播州の諸豪族はまだ中世的な気分がつよく、家門の上下や筋目の良否という意識が濃厚で、秀吉が播州に出現したときも、

「かれは、いかなる家の子ぞ」

という詮索の声がほうぼうでささやかれた。こういう詮索などは、早い時期に中世的なものが破壊された地方ではもう流行もしないのだが、播州ではなお、鎌倉・室町の気分が残っている。

秀吉はおそらくこういう気分の土地で、互いに膝を抱き合って天下の趨勢を論じ、人心を攪るという仕事をみずからする気がしなかったのかもしれない。

(やれば、相手が増長するばかりだ)

と、おもっていたであろう。秀吉が優しい態度をみ

せれば、相手は織田氏に弱味があるからだとしか見ない。

それよりも、大いに武威を見せ、力でもって屈服させ、相手が謙虚になったところを見はからって当方の赤心を見せてやる、というほかなかった。

要するに、播州人に対して臨んでいる秀吉の態度というのは、織田氏の勢威を藉りてひどく高飛車であった。

「播州に入れば、評定をひらく」

と、さきに触れてある。諸豪族を一堂にあつめて対毛利の軍議を練ろうというのである。

場所とは、姫路ではない。姫路では西に寄りすぎる。加古川ということにした。

加古川は播州の海岸線のほぼ中所にあり、どの地方からやってくるにしても便利であった。

加古川は、明石から海岸線を西へ五里のところにある。

播州の海岸はほぼ白砂で、とくに高砂や相生の松原で代表されるように、海と陸のあいだを松林が美しく

縁どっているが、加古川の浜も例外でない。

川が印南野をうるおしつ、海へそそぐ。この川が加古川とよばれたり、印南川とよばれたりする。

その河口付近の地名はふるくは加古（賀古）とよばれていたのだが、いつのまにか川の名が地名になった。このあたり数千石の野を、糟屋（加須屋）という豪族が領している。鎌倉幕府のころ相模国に糟屋という土豪があつて、伯耆（鳥取県）に所領をもらつた。その支族が播州へ南下して加古川の地頭になったといわれるから、鎌倉以来の名家といつていい。

ここの糟屋氏の例もまた、播州においては階層の流動がすくなく、鎌倉・室町の地頭体制が半ば崩れつとも生きている、ということであらわしている。

その糟屋氏の若い当主の助右衛門は、秀吉が播州入りをしたとき、ひどく秀吉になつき、

——ぜひ、御旗本に加えて頂きたい。

と、頼んだ。秀吉は直参武士団の充実に懸命になっていたときだけに、その武骨で正直そうな面魂を見込み、いきなり小姓組の組頭にした。親衛隊長といつてよく、本来なら屈強なだけでなく、譜代重恩の者がえ

らばれるのだが、にわか大名の秀吉の場合、そういうことはいつていられない。糟屋はのち秀吉の子飼の加藤清正や福島正則らとともに賤ヶ岳の七本槍の一人になり、さらに累進して内膳正と称し、一万二千石の大名になる。関ヶ原のときは西軍に属したため本領を没収されたが、その子孫は徳川家に召しかえられ、小禄の直参として家名を存続させた。

秀吉の加古川評定は、この糟屋の城館を会場にしておこなわれた。

この間、官兵衛は多忙だった。

かれは西方の敵である備前の宇喜多氏の情勢をさぐる一方、播州の豪族を駆り催して加古川の糟屋館に集まるよう人を派遣して説かせてまわった。

とくに播州第一等の勢力である三木城の別所氏に対しては、官兵衛みずからがゆき、城主長治に謁した。

別所氏の身上は、石高でいえば二十万石ほどもあるであろう。実力からいえば近江長浜の領主である羽柴秀吉とかわるところがない。この当時の播州人の重んずる門地でいえば貴賤くらべようがなく、さらには播州一円に対する影響力もつよい。

若い当主の別所長治は、細面で目が涼しげに輝いているあたり、凡庸でない男なのだが、ただ政治と軍事にうとかった。というより、幼少のころからの輔佐者である二人の叔父の個性が強すぎ、長治自身はほとんど物事を決定しない。

「加古川まで来てくださいますか」

と、官兵衛はいった。長治自身が加古川までくれば播州は一層にまとまるのである。

が、長治は、それは山城（叔父の別所賀相）にまかせてある、というのみで、それ以上の返事をしなかった。

官兵衛が播州において果たしている役割は、古代中国の戦国期にあらわれる外交弁舌家（縱横家）の蘇秦や張儀のはたらきに似ているかもしれない。

張儀は戦国の諸国を遊説して、あるとき命をおとしかねないはめに遭った。その妻が、もう遊説をやめてほしいというと、張儀は舌をみせ、

「この舌のあるかぎり大丈夫だ」

といった、という。官兵衛はおそらくこの故事を知

っていたであろう。かれは、この当時のこの階層の武士としては、学問があった。少年の日、蘇秦、張儀といった縦横家の事歴を『史記』か『戦国策』で読み、かれらの、孤独ながらも昂然たる姿に血を湧かしたであろう。

当時、秦という、やや未開性をもった強大な国家がその力を増大しつつあり、六つの古い都市国家群（楚、燕、斉、韓、魏、趙）の存亡があやぶまれていた。

蘇秦も張儀も、鬼谷先生という人物の弟子である。鬼谷先生のもとで縦横の術をまなび、ともに諸王を歴訪して遊説の人になった。

蘇秦は、六つの都市国家の王に合縱の策を説き、六国が同盟して秦にあたることをすすめる、その策が入れられ、六国の相（大臣）になった。この同盟のために秦の軍隊は十五年間、函谷関以東に出ることができなかったという。

張儀は、秦につかえた。秦に仕えたとはいえ、蘇秦と同様、秦の害禍が六国におよぶことをふせぐためであった。やがて蘇秦の合縦策の矛盾が大きくなりはじめたころ、いちはやくあたらしい力の均衡法として、

六国はいつそ秦と同盟せよ、という連衡策をたて、六国を遊説してまわってそれを樹立させた。

蘇秦も張儀も、もともと門地なく領地なく、ただあるのはその雄弁と論理と外交術のみである。

官兵衛には多少の門地があり、わずかな領地があつて、その点、蘇秦・張儀のような天下を遊説する孤客ではない。そのことは、もし蘇秦・張儀たろうとする場合、利点でなく、むしろ足がらみになっていた。小寺氏のような小規模の、それも時勢に対して保守的な大名の家老である場合は、そのことが官兵衛の飛翔のための足枷になっている。

しかしながら、この時期の官兵衛がやっていることは、蘇秦・張儀に類似したことであった。日本の戦国期にいわれる遊説家、縦横家があらわれなかったが、辛うじて官兵衛がその唯一の人物であり、この時期の官兵衛はそれを気取る気持が多少あり、その多少の思いと昂揚が、播州各地や備前あたりまで足をのぼしているかれの活動のさきえになっていたかもしれない。

ただしこの場合、官兵衛が説いてまわったのは、張儀の連衡策であった。秦が、織田氏にあたる。六つの

都市国家に相当する播州諸侯群は織田氏と同盟せよ、
というのである。

もっとも、蘇秦・張儀よりも官兵衛の場合、こまつたことは、強大なる存在は東方の織田氏だけでないということだった。西方に毛利氏がいた。

播州最大の勢力である東播の三木城主別所氏は、この加古川評定のはじまるころには、毛利氏への加担をひそかにきめていたらしい。

「山城どの」

といわれている別所氏の一番家老別所山城守賀相が、別所氏の外交を動かしている。

その実弟の重棟とともに当主長治の輔佐者で、重棟よりも勢力があり、賀相が事実上の摂政といっている。

どちらも、大した人物ではなかった。

その双方が、別所家の家臣団に閥をつくり、双方の閥がたがいに憎み、たがいに猜疑しあい、異なる党閥の者が路上で出会ってもあいさつさえしないという風ができてしまっている。

その賀相の閥のほうが圧倒的に大きい。この「山城どの同心」の者のなかには、この当時に流行していた一向宗（本願寺）の宗徒が多く、従って、宗旨の上からの織田ぎらいであった。

「仏敵」

などという言葉を織田氏に対してつかう。大坂石山にある本山がその言葉を天下に流布させて各地で織田氏と戦ってきたためで、このため一向宗徒である者は、一向宗徒であるかぎり、どの大名に属していても織田ぎらいであった。

大坂の本願寺はいま、掘ぎわまで織田勢に寄せられつつも、果敢に持久戦を戦いつづけている。外交活動もさかんであった。毛利氏と強固に手をにぎっているほか、天下のめばしい反織田勢力とはことごとく同盟していた。それだけでなく、各地に遊説の僧俗を派遣して、織田勢力とたたかうことをすすめてきた。

この時代の一向宗の宗徒の熱狂的信仰というのは、後世からは想像しがたいほどにつよく、ついには、「本願寺のために戦えば極楽往生疑いなし」

ということさえ、本山から流布された。本願寺の宗

祖は親鸞だが、親鸞の厳格な安心あんしんの思想からいえばそういうことは異安心(異端)で、本山みずから、危急存亡のために異安心を流布していたことになる。

播州の一向宗はさかんで、播州門徒といわれるほどであったが、その連中が仏敵である織田方に加担するはずがない。別所賀相は一向門徒でなかったが、かれの同族、家臣、加担者には門徒が多い。

かれらはつねづね賀相を説き、というより半ば脅迫するようにして、

「織田に味方なさるようなら、別所の御家もそれまででございましょう」

といっている。離反する、という。郷や村を支配している地侍たちの支持で別所氏が成立している以上、その連中が離反すればたちどころに別所氏はくずれてしまうのである。

とくに、宇野氏という、別所氏にとっては古くからの一族にあたる地侍などは、大坂の本願寺の籠城戦にも同族を送っているために、別所への忠節心より、本願寺への忠誠心で物事を考えていた。

「西播広瀬といふ所に宇野の某と云ふ者城を構へ、秀

吉に従はざりければ」

という『豊鏡とよかがた』に出ている宇野氏も、宇野一族の一派である。かれらが、別所氏の家老別所賀相を支持した。賀相はその党閥としての勢力を維持してゆくには、これら一向宗徒を裏切ることができないのである。

軍評定いんきやうじやうのため加古川の糟屋すわの館ぐんに集まれよ、という触れが、三木城主別所長治のもとにきている。

触れは、二カ所からきた。ひとつは、官兵衛である。官兵衛は小身であるために「触れ」などというものを廢もたせに三木へ行つたわけではない。ただ、雑談のついでにそのことを念押しした。それでもあとで、「御着の小寺は、羽柴に取り入って触頭ふしづのつもりでいるか」

と、一番家老の別所賀相を怒らせた。

「触頭」

というのは、ふつうその国で勢力第一等の領主がなる。播州では当然、別所氏である。当主、別所長治が播州における触頭たるべき者であった。信長もさきに

二番家老別所重棟が拜謁したとき、

「中国入りの先鋒大將は、長治に頼むなり」

と、言明し、その後、書簡でもそのことを言つてよこしている。先鋒、先手というのは、その国における触頭といつていい。

ところが、ここ五十年以上、小戦を繰り返してきた御着の小寺氏が、

——加古川へ集まれよ。

というのは、別所氏からみれば筋ちがいもはなはだしい。小寺氏など、小家こやではないか。

しかもその小寺氏も、御着城主小寺藤兵衛が動いておらず、官兵衛という家老の分際にすぎぬ者が動きまわっている。

「小頼でならぬ」

というのが、人一倍、こういうことにうるさい別所賀相の憤慨であつた。

このあたり、官兵衛も厄介なしごとを背負いこんだものであつた。いかにかれが『戦国策』の時代の蘇秦・張儀を気取ろうとも、中国のその時代のように、播州では政治的論理が通用しないのである。六国

である楚、燕、斉、韓、魏、趙の国王たちは、縦横家の説くところの外交の論理を理解したからこそそれを用いたのだが、いわば日本の事情の横溢した播州ではそうはいかなかった。

——加古川に集まれ。

という羽柴秀吉の命令を、別所長治に正式につたえたのは官兵衛でなく、二番家老の別所重棟（賀相の弟）であつた。重棟は兄の賀相とはちがい、早くから織田氏に接近し、こんどの加古川評定においても、秀吉のそばにあつて、その支度方しどかたをつとめている。ほとんど秀吉の家来のものであるといつていい。

重棟をきらう賀相にすれば、小寺の問題よりもそのほうが片腹痛かつた。

「あの馬鹿が」

と、賀相は重棟のことをいう。

「——織田誇ほりをしおつて」

織田の天下になれば、当然、早くから織田氏に接近していた重棟のほうが別所家における大勢力をつくることになり、賀相の勢力は転落せざるをえない。

（たれが織田氏につくものか）